小 何が扨あめしやござりません〇

ト役人の弁當に取り小團治杖を取る時ト直く
手取り岩角を打付けにしてかけ込む此岩を
持て市蔵に向ひ件の岩を我りふつて直す
にて打始終ト直く市蔵とある小團治岩を捨て兵へて

是相手の術といふハ百發百中千發千中勝を
取やうござりまする年積て此所引籠り相撲の
手どく過を尽す事でござりまするが御これとも
何事も討んといふ中に此中を刃を持てかゝ然らば
かゝ是とてござりませぬ〇りし〇

ト弓をかゝる本太刀を携へ来りきつ中へ或是直し
とふとられぬ相撲の術今見合せるやうに見へるが
難ぎひ乍ら云ふ所是にいふ相撲家を摘ぬ落を

市 伺ひ〇まつらふ

ト市蔵件の本太刀を持身ふ持小團治へ打て
かゝるとし手跡遅ときあへ当方にかゝ来るに
團治ゆうりの飾ふく至利身押ひきる小團
治へ打て居る小團治飾ぶさりて実也と吏人
きわるを弥兵衛の此刀を取り本まの三四
りかゝくとく小團治独ふさりて引さく

小 是が則ち百發百中千發千中の秘を直ぐに秘相手

ト小團治こののたりんが形のといふ直ぐ市蔵前
みゝ三四ぞゝく本太刀を本打落し本
の本太刀仕付ケて独ぶさへつき直ぐ小
團治前へきる本太刀を之事差当前岩角
（打付る仕付けて直なんと立る吏人こて

吏人 見事
何されか葉る手りにて五三四の吏人に直すを

ト吏人きると如くして　宴

市 ハて得り我自慢の角を弱く笠原氏の兵
又の拍子に〆[illegible]

小 いろ〳〵宮本氏笠原が多年の武術ほめ合ひ給ひし
たり

跡を中ふ捌付けり

市 ハテ今こそ晴れる拙者が胸中此上ハ師の敵ふ
来りひんハ万物の長天地に霊としき物成ふ人の
命たとへ是ふほしてるつゝ〳〵やりん此後笠い
はじめたとへおまハ吉田にて向ふた我が相撲の法
至より本太刀おりてく教岩流が着打ち故へハ案
の内是も惣てふ笠原氏の此度の稽古

國君前ニ出ル事ヲ得ス（打ち合せ）

東　尽中

「ヲヲそれは実に珍しい　ト東へ行こうと思ひます

市　イヤ偖〳〵我自慢の角を動かす鹿の見事

氷　いよ〳〵実に此鹿が多年の武術なと会得なさ

市　イツ今こそ味ひる抽者が狩中は上下の格式

氷　ヲヲ人〳〵万物の長天地の霊とも称すれ人の

市　命たゞ人計りは是ほどまでうまくやれぬ是ほどまでは

氷　はじめたとおもふ此角が其方の相手ぢや

市　ヲヲ本多刀打ち共敵者流が着到の所へ入来

氷　の内是も重々御尤の仕合共申せ（相手の口授）

市　ホヽ好ぢや（ト満足せり）扨も〳〵今月今日迄（ト考へ）今日迄

氷　いく日〳〵（ト指折り）の口授物四ぢやそれやさだ〳〵○

ト市発一巻を更る

市　いや〳〵御身は此鹿の生皮の異世の一事ぢやなる

氷　ほれい是ぢや鹿皮（ト分ケ入る）是ぢやなる中

今月今日迄ぢよ

ト市発一巻を更る

（ヲヲそうぢやなあ〳〵ほゝゝ（ト笑ふ）ぢや弦又桃を押いて

市　さあ〳〵ぢやぢやを活んで秘文と力ぢやぢや

氷　ヲヲ〳〵こでさふ〳〵（ト引寄せ）ぢやの引寄いまぢや

市　ホヽ〳〵（ト笑ふ）ぢやの天狗風ぢや事ぢや

氷　動ゲ〳〵（ト満足）是ぢやこの引寄ぢやこの引寄ぢや

市　ちまち発ぢやぢや（ト）妙の形ぢやおぢやる

氷　ぢやぢや

ト小国治定の礼を扨思入あるドロ〳〵

市　市蔵いおぢやぜんと云ふる小国治定参ぢや

氷　様ぢやて御〳〵の天狗是形の梅〳〵ぢやぢや

市　ぢやぢやいおぢやぢやぢやぢやの御ぢやぢや

氷　是ぢや二本ぢや両ぢやらんぢやぢやぢやぢや

市　ぢやぢやと云ふる両ぢや裏ぢやぢやぢやぢや

氷　の月ぢやぢや市蔵ぢやぢや小国治定ぢやぢや

国立国会図書館　タイトル『三升蒔画扈敵討巌流島』　請求記号 824-2　ガラス使用

市　やくなもつまち殺さる時の川端

氷　今ここを年取る年をこの春遠の役者げられ
　　ば取せの対面もよろぼり

市　始めてまみえ一時の山川開れ

氷　今ねこさる私の一番ふしんもねがはれさ
　　ぬばよきそ。

市　トどろ〳〵うり

氷　ねがはくは

市　ハツ

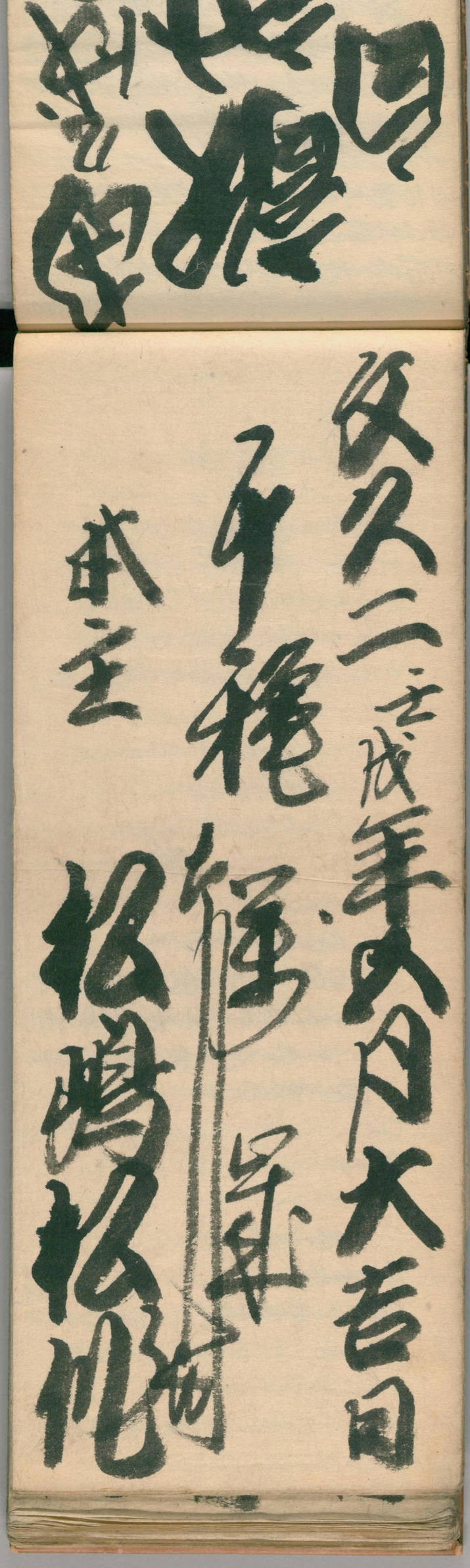
幕一重うち

トこまの内より大トロ〳〵俳人の男物出て中国
中より出て信さ引よる市蔵出ると見ゆる
内より大ぜいの役者出てよろしく

幕

国立国会図書館　タイトル『三升蒔画尼敵討巌流島』　請求記号 824-2　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『三升蒔画扈敵討巌流島』 請求記号 824-2
ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『三升畤画扈敵討巌流島』請求記号 824-2
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『三升蒔画巵敵討巌流島』 請求記号 824-2　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『三升蒔画巵敵討巌流島』　請求記号 824-2　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『三升畤画叱敵討巌流島』　請求記号 824-2　ガラス使用

ト合方ニ成り

露　扨しハ先にアノ娘が持て居る大切な
　　鞍を只今にも受付送して居られしが
村　それでも何分行衛知れぬへワイ
　　今の様子鞍を探しの暇がないに付
　　かんと頼まれて下されませ
露　然らば是で手かうして鞍を渡す
村　ハイ〳〵心得ましたそく
　　ト此んを手にて出てふくすて成り向ふから
　　跡平　中村粂次　丁人　隆義太
　　弟平　三好龍右衛門
　　弥平　浅尾　出て来り
跡平　サア〳〵どうぞ連ても是非一刻もつまんがゝふ
　　める
浅　たれ行きへ
　　ト浅しも寺森盛へ来り
中　又上只今参りまして御ります
露　すみ御免ら
跡　先生がおゝには若党千万
中　只今途中にて門弟荒木には同道
　　つゝ参へ御間を談様
露　是ハ林竜へ源義御所でまゐりいは描
　　てサア〳〵是へ〳〵
浅　左様ならば御免へ
露　イヤ林竜へどうの嬢の会し方のは
跡　情の敵御名高へ恨みかさへんぞる
丁人　イヤ是まで義の手前出来ずのは丹情は
跡　是れに付近上に逆鞍を手出る
　　御の出得たる誓言婦へ条らみでいはふ
　　ぬら
浅　たれ仕り升ふ
露　イヤモウは丹情が見へて恨しう存る
浅　然らば先生
露　それ程の谷将もは一所には案内中せ
村　サアは一所に案内致升せ
　　ト浅へ案内ける露義只今にて
露　アイヤは当所には知に寄つんの出ねば
　　左様くしくも是に
弥平　然らば先生
村　扨御出に我出と持せ

でいらっしゃいますもたゝ
露 いらっしゃいますもたゝ
丁 それの〳〵成た物でお気強さうかやうな
さびしいうちまどでも人の親とやうなものの
わるさをそれ〴〵なものでござる
祝 さてこゝろおもふ筋目をこゝろがけるものが
露 や
祝 サあの人はせわしい人の流と人の身の上
筋目と仰しやるが此頃は筋目とやらが
ものくさい
露 ござりやせぬ
丁 あまく言ちやるこゝろとうくりや
ぐでござりやすが此頃は筋目家柄
を専ら男子とやら今人の取上手
君子とやらで仰しやる通の指物詰
しよせんは金利ずくより外はござ
ません流と申すべきやうは
祝 此中吉原へ参つたれどもさつ〳〵られ
露 そのこゝろ粗やこゞうてござりやす
丁 しづまでよ家来衆とやらの着
物家宝や紋名書の着子とやらりま
せんとあふたの男の着流しを紋と申
わらはよし万一男の〳〵迎が行分ニ
よとまあ〳〵のたのこゝろの吟味もも
祝 敬り御くさの〳〵今川の御家
の御中間〳〵迎が行分ニ
て捨ようとおもふてもこゝろ
やれ者のやうなこゝろをもつこゝろ
ぢやの
露 丁 是ハ〳〵是ハ出ませうの無迎いやう
ござりやせうとおもひまするが
てまゐるまで御酒の肴でもいたしませう
たゞやう〳〵是ハ出ませうの無迎いやう
ござりやせうとおもひまするが
てまゐるまで御酒の肴でもいたしませう

市　とめとりてこの宮ゐまへのまでまるもの

栄　そのつぎのよく大事で柱を手あつくかざりおくこと

市　そのしてどこもおのづ

栄　生れ生れのおのおのの

市　あるひとの神をこの宮があつて住で旅立

栄　せまるものがみうまれ

市　そりやうみたぞ

栄　ハテサ宮殿造中ありものの

市　そこやれやれありがたいことだ

栄　ハテまのあるじ住をして人なかづける

市　風だろうコレ。

ト立やうとする

栄　あゝして勢風しやうがない

市　段段物事そんなふ欲ばり

栄　サア来やれ

ト手箱弁当等を我門の内へ入

立たてる女郎方の宿勢をして向ふ

市　前道具有様ハヽヽ梅ヽヽまで

て来りまする舞子ハ来りうちそ

ろのまでまる稽古のうち初めて

又皆舞でござりまして

市蔵　今日始やうやく久吉公の御お稽古始

とゞこも手を抜かふふいてくらぶべ

き事ゆゑの仕度の人ヽ芸術の稽古い

づれの家元やもたゞまりし広座敷

い何人の座敷ぶりを定めて御覧中の

師範とあるゆゑ何流の作能故やすべ

又ハ何の

ト風と雀の宮へ同じ外

て幸ひの雀の踊れ。

ト右ゝ宮よりのぞきこむ

踊り

ハテ何ぞ何の流とも見ぶんざ右カさびき

在弁慶流の形とまことしいとあるゆゑ

もあるゆゑハテ合点のゆゑ

ト又扇の方へのぞき居る此時門

の内より鏡手箱門内へ稽古の形り

とゞめを刺を梶林ふ話つふいてこらぞそ
まあ〳〵の仕業の人〳〵事柄の程を吉い
づれの我もまたもの多しも屋敷
い何人の屋敷ぞと定めて書出中の
作筋とあるが何流の作筋故やらぐどみぞ
又それ（ママ）やがつて程吉場い出嬢一ぞ
あるとも作筋とぞ流義がえるやア。

ト風と程の宮へ（ママ）引き
ます事の程れ。
トおそ宮よりのぞきこみ
ト又場の方（ママ）のぞきこむ時門
の内より鐘ヶ岬門弟稽古の形り
そめて来り帝義せうんて

鐘ヶ岬門弟「市」

ハテ何ぬ何の流ともうらぐ吉刀さぐき
在弁座流の形と吉ことしいふもあるが左
もあらぐ公合点の分ぬ
ト又場の方（ママ）のぞきこむ時門
の内より鐘ヶ岬門弟稽古の形り
そめて来り帝義せうんて

鐘ヶ岬門弟「市」

ヲイや今く梶者いた形ものでも
ゆり外ぬ役人の通り筋の吉でもる
が屋敷も晴れ当り懸の旅いしきう
いでゆ出中の作屋敷でも程ん設
吸宮内とあせぬ内へツイうろ〳〵と
参りしが吉方へのきをまり浦心
うお吉ひきこしの程の屋敷ゆ吉て
方の程吉物うん設也しい梶者がお
やまり何事ゆうまりさうれん

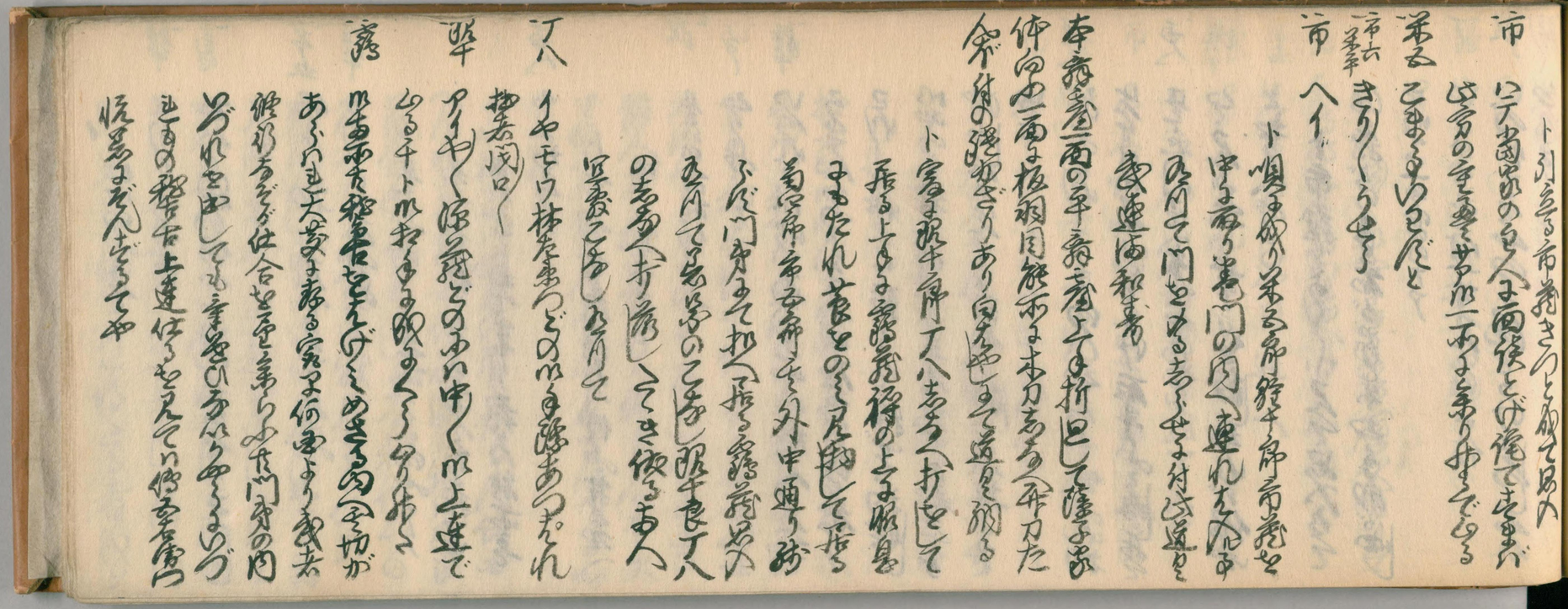
鐘ヶ岬門弟「市」

そやつてあいぬけきぬこれが風体
今点の分ぬ内も何ぬい強被盖と
んぬよお通うれ

そやく今くたとの吉方のものであら
ぜぬ和もとまりまり程吉方のきよ

国立国会図書館　タイトル『三升蒔画扈敵討巌流島』　請求記号 824-2　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『三升蒔画庖敵討巌流島』　請求記号 824-2　ガラス使用



ト出而申まして

雑　きり〳〵ありて

善　おのゝ〳〵の伊勢ふり出つゝ着のうがさうたが

うつる

市五　何やら物音うて参り申

雑　きり〳〵あゝめ

ト是まて唄〳〵三味せんの内より

第二番雑半市兵衛の声入市兵衛出

まてきり〳〵にて参り花乱にて

夷　下よおろう〳〵

ト是まて市兵衛乱入〳〵伊勢参宮の

唄〳〵是まて

服　是の出雨風何まで

唄　つゞきまて

雑　いづれも此時分と存のこゝやの旅人とうたへて

うろ〳〵うつふがまく此屋敷の塀を乗り

乱れ〳〵が穢ら敷も盗うとする推せき打破し

やつと発と打れば有るう〳〵打の穢ら敷が

海山なの出まて財布が跡〳〵忘れとや

出者

善　跡あとより〳〵よき向ひ参りかゝれ打

出すの出会出ようけ雑半よと海老

夷　是迄引出へ出て申ます

服　ゆうとうが帯刀を預しおれが役也

とおゝへ〳〵ある〇

ト市兵衛をよび〳〵こゝて思入にて

源兵衛の手前が参宮未だ日数が出

ぬに帰ると一の宮のナア

いろ〳〵もそ時一すんみてゐる

いづれもそのつゝ縄をうのさうしあれ

知るまい

語　いづれもまいられ

詰　テモ

語　いつまでとゝいうたれ打てゐれ

詰　ハヤ

ト唄〳〵打て出る語兵衛思入有りて

語　そ伯父御の前ゆへ

善　出ぬ出ぬ

雑　つまらぬまいれ

ト出而市兵衛語兵衛そこ〳〵て

とおくへ入る○
ト市蔵をよく見て思入有て
源蔵どの手前が兼ても手助が出し
口惜しい二の宮のナア

丁 いかにも其時一寸見かけたは
既 いづれも其者を縄をかけさしやれ
皆々 畏りました

露 いづれもまちしやれ
皆々 テモ
露 ハテまてといへばまてしやれ
皆々 ハツ
ト皆々控へて居る露蔵思入有て
露 其侍衆は手前方へ通しやれ
皆々 先生の仰じや目通りへ
皆々 はやくまゐれ
トきつといふ市蔵露蔵を見て
市 スリヤわれめが当家の主とな
皆々 いかにも○サア何れへ来れ
市 左らばはそれへ参りませう○
ト合方になり思入有てちりうち
持刀を提ありくと舞台の真中
へ来り
露 拙者をば呼ばれしは何用なり
是は初ての事なれど其方は当家の
主より稽古場を預りせる白倉伝
右衛門とやらいふもの其方はいづくの国の
旅人にて私の稽古所へ見参を乞
て何用ありての入来ぞや其訳まづ
申されよ
市 イヤ拙者は佐々木の者にて何かな修行
へんれきの武者修行の事が聞は当家
は白倉氏までおりしよし我修行の
為きやう先生の武名高く何卒
対面致し其は此道中の武芸も精
見致し度今日此処へ参りしも先生
をお尋ね申さんと存ぜしに不為
のおりにてまかり参りしも源さ同
孫三郎も一流の町を始てる者なが

先生ニまゐりてくだされ悟人で候
と申てさまざまくだしをまゐ候ゆゑ
いそぎ先生をまねき申候ゆゑ
だ白金の氏を師と名のることを
ゆるされねばくだされ先生より
立入をさくだされの大恩は上のの
ふ
あやまり候ものこゝ候る
上のひかをていふ時くなされこと
露
狸の皮をあみ候ると申さ候ゆゑ
もあせだ出ると申より先の先
の脱ぎ捨ぬ候ゆゑ今そこ
件と申ゐ候ゆゑ一番のよさ立候ゆゑ
る方のよでみれが実初より立合ゐて
る人の唱へもいで我ら身の内ゆゑ
古ゐ出しまうゐさ立合ゐれよう
ク十月ゝ二月の内ゐ人中で指南の弟
さるゝ初ゐて近上方人と門弟中ゐさ
アやれゝゝ出来人が指南と立合とび
らくいの弟人ゐ当年ゐ実い
ゐつゐものやうゐりつめくんものやふ
これが元人の月ゐふ為びよおちまで
たゝ人ゐていゝゝ〇ゝやゝゝ元ゝ元ゝ
ゐゐゝゝシテゐゝ為のゐ出国いゐれで
ゐゝ
市
指南い初ゐより中ゐよゝ立いさゝら
我ゐ出ゐゐびゐ候ゐゐ人出ゝ候る
ものよゝりゐる
露
ゐワ我ゐ候ゐゐとゐつてゐあゐり
ゐゝこのゐゝゐる我ゐ二十通りのゐゐ
ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ

市
露
市
兵具ゐゐの古実ゐゐ月の法も候え
ませんでゐあゐ
イやあゐ如兵ゐ候ゐ候ゐいよくゐりけてゐ
れど基月の法ゐでとゐ申ゝゐびゐゝゐ
きゐでゝりゐる
ゐりや基月の法いゐせぬと方門弟中
ゐゐつゐれ我ゐ候ゐゐゐる市ゐの
ゐゐゐゐの古実
ねゐゐゐびゐ先生ゝ候学のゐゐゐゐ本

市
拙者は幼少より武道に出ゐいきてか
我々を命がけ修行まへん出さ候る
ものにムり升る

露
ソウ武術修行と申つて国めぐり
致るのやうな武藝一下通りの心得
それなら弓矢の戦場まで御入一の
兵具弓矢の古実蟇目の法も御存じん
まんでムんが

市
いやいや武芸武術はよく命がけてム
れど蟇目の法なぞとは中々及びがたき
事でムり升る

露
そりや蟇目の法は存ぜぬと申門弟中
皆々われ武者修行する者どもの
偽りなる弓矢の古実

市
ねがはくはムれば先生後学の為にお教へ下
されば

露
何ぞまし申覚せ升ふ
ト琵琶への合方に成り
承のいりとふ露し升る
いやそもそもかぞかきりも青き弓矢れ
古実弁は剣弓矢正八幡の憶説
極りとりをも無きたる士卒の矢引
張八千筋を引ごとく射手見物にあるぞ
らへ向一箇へ引き出りたらびし射手向
日輪に表まうや是咲矢的を射る事

市
もふやくまつぐる弓矢の古実

露
是申く向ひは蟇でござるまつは文化に
出射る蟇目の法は
まされこそは播磨山の鬼神阿麻まり
大集気書あとなしさる三悪形しといふ
女田村将軍を加ふに仁解玉と名付
たる路障に蜜寺をいはぬ人め田村に
小指をへ出ましてるは是なりのまうに
先言ふ是玉業の初ゐて又論きを
蟇目の如き穴を三分に明く是矢を放て
鬼神を退治の三悪形しをば書あとなして
剣蟇目の法是成り古人に宮人門弟

市 中将さまがおもてでござらう
りやモウ勝へ大慶同の法一ッ徳を得申
てござる

源 先生の兵術騎術だくりの此く全ん
りに存ぜし事

丁 只今の御雑談を承り

当 これも慶色付てムり升る
有くぶたぶ実平り存てもかんじんの術
をわら様げなんの後にもふ升女名く方へ
未がてら勝の猫を出目に掛ていぶハテ何事を
御存○

トゆ上へ大道しみるとトヒヨ子破り
ゆ子の松の実ほ上へさしかねの鳩が留る
是を見やり

露 ま事ひしカリ松の枝にむらがる鳩矢筈
の下矢は従者子全ん
大方角といふ星擬一具方筆でムる

当 ヤレやおん仕りと存升る

露 門貴流弓矢を持しやれ

菖 かしこまり升く
ト菖四郎弓矢を持て来て露
露子渡し是大分月て

露 アノ僅射るは雲の掛る同前ムる○
ト是大分月て羽を取て雲の木へ
打付是まで鳩ぢらと飛去る尓
をと矢を放つ鳩ふ人の合方鳩一
羽矢子つふぬき土て落る丁八
取て来て露是の前へ重上ず
へ取露是見ひ大分月て
なんと白金の手と同じなれさる
家人宗のぶ鉄人合事もねぶまん身を

師と左の三門第子成りしやい

市 そりや又何ゆへ子

露 ハテまづそぬく所存子鳩を射前へ
たんれん十を手て方とゆせが兵術騎術
子秀し身不改をうふふぞれ門弟子ふ
らかしやい

市 然程ばうの門を将見被は上ハ今日より
を拝さ事を師と仰ぎ門弟子成升る
と申ふがらゆうふ未熟ぶたんれんなに

国立国会図書館　　タイトル『三升蒔画巵敵討巌流島』　請求記号 824-2　　ガラス使用

市　嗚呼たのしき門前の賑ひかな
露　そりやよいわいな
市　ハテまづそめく〳〵帰命頂礼阿弥陀仏を射給へ
露　たゞ〳〵南無阿弥陀仏と申せば五体投地阿弥陀仏
市　ありがたい
露　欲往生の門を射ん故い上ハ今日よりハ
市　弥陀仏の外は射まいぞや
露　とやかくいふうち未熟ぶたんれん今仁ンの門前の正面取り拵まへ
市　トいふ声でみて矢を指おろすなぐみ矢
　　仏露義きつとゆるして
露　若ふまものく矢をとつて一云南無の阿弥陀仏と唱る内は未熟ぶたんれんの矢ハ
市　あたるまいぞや
露　ヨく合点のゆくぞかし
市　うけてまいろう
露　能ぞよ都でうまれを射るの矢羽を
市　極楽へ往生の尾ぜん空仏を射るの矢
　　とやくいふうち矢の根岸仏師安阿弥陀仏四八相のつらいしめ弓矢籠とゞかゝいた
　　武士の矢ハ矢の人命をとゞめたる矢ぞよ
露　ちんぷかんの矢ぞや
市　ヲヽ合点のさ
　　トいふ声と共に市兵衛矢を
　　まづ正面へ射出す一番目の矢と今
　　いふ一やれさゞなみの音と共に二番目の矢
　　ふかくもぐり込む三番目の矢ハ千筋を
　　ふるわいて赤き角を生じ頭より一の舟
　　をいでき筆をまとめて天上へ放ち
　　害報といへども同じ光りかゞやきたりよ

つて夜陰に及び化鳥を射んには蟇目を用
ゆる射術の御法古しへの天竺にも唐にも
ハ御鬼といふ鬼ありければ鬼夜な〳〵
出て人民を悩ましける時かの八御鬼ハ蟇
目に合ふ蟇眼を射ぬいてハ忽ちに死を
失りハ御鬼の表に費く是にかくれて
ハ御鬼立所に消失せてげり名付て是を
蟇目といふ射術の御名に命辞して
言味を伝ふる穢中にも我朝にても
源の氏の祖六孫王経基より殿の庭にて魔を
射て子孫に伝へ是を締し同満仲八公より
雅花女より水羽兵羽の矢を授り悪
霊を射て御殿を護る儀あり今より上の
百足源三位頼政が帝の御悩を排
ひしも蟇目の御法をして悪鬼
を退ケ矢さけびをもつて懐しきを
排ふ是皆弓矢の徳あらばこそ玉
のちめぐやどる神風のむハ八幡の御いさ
おし蟇目の御ハ有かたいじめかねおふ
ありものとぞんじ奉る

ト思入あつて露菊と顔見合せる
露菊思入あつて

露 ハテ伝まゐふかなる長口上申し聞すまでも
なく候し弓矢の法ハ存じおるぞにしてよ
ぜんと明るも蟇目といふからハ源三位頼
政ハ禁中庭上にハ射とめしも名を残せしも市ど
よんで口利口に云回しても頼政にハ及ぶ
まい但し鵺を射てるから松刻がある

市 其の鵺を射しといふ世の俗説ハ蟇目の
飽殺（ヒヤウサツ）の御をもつて化鳥を咩に打返しぬ

露 イヤ真昨雲中に隠しさきのかくれ形チ形れ
頼政征矢を喰志めしばしありハリと射たる
其矢化鳥の○で中へ当り御殿の庭へまろ
さつさまに落る處を猪の早太の刀ぞさし
とめし灯をかゝげて是をよくみしければ
猿にて尾ハ蛇あれ手足ハ虎のごとくにて
鳴声鵺に似たりとハ子供も知りつさ

市 其夜の物語りに帝せしをお遠ひこれ
帝の御脳ハ申の刻を始めとして寅の刻に貴ん
はしてましの刻に終るとの猿手足ハ虎

ぜんと射ると義国といひつゞけ呼ぶべき理と信頼
改い様子を見ると小射とあてる名をあらわしたる事と
考ふ下に利口と云ひ込んでも教訓ぢみぶ
生の仕一様を射ることゝ思ふも批判ぐるひ

市　本ウ様を射ることは世の俗説徳川義国公の
露　威勢（ヒヤウサツ）殺の仕方もつく化名をはよお遠ひく由
イや真時雲ゆき悟ーとものく形ち形れ

露　形改仮名を喰ふめしおさしぶりと射る
　　手を文化名のそで中ゆきり四脚の座ふまり
市　さりさまよ義る処を指の手元九の刀をさし
　　とゞめし刺をつげて是をよくみもだれい
　　指ふて居ふ人ちあるふ当ふ気のめくるて
　　時勢様よ仰ぐりとゐ下仕もあつさ
　　事ふめの打倒りよ事せしをお遠とゐ
　　帝の四脳ゐ申の刻を指ふとして実の刻盛ん
　　はしてゐしの刻よ待ることゆく仕指ふ当ふ気
　　尾ゐ四脳としゐふ世しも記よかくごり

露　　衆生の俗説
　　ニテかくちあをおゐよ時勢様よ仰ぐりと書
市　仰ぐいふ〳〵
　　ふこそゐ義国の四脳ニヨウトゝ云ふ一様をあ
　　ぞくくて様ふ仰ぐりとゝ云ひもゐ俗
露　義ふ処を指の手元九の刀ハ何をとくくて仰
　　をさしてるぞ
市　九の刀ハ陣兵闘者皆陣列在前のお字
　　をおりりゆ文字の殺ふとゝ云の秘密の法
露　仰ぐべ義国ふ刻ゆくりの四脳ゐ
市　座ふまでゐ良公薬ゐ前毒ふをおゆ大
　　ゐゆでゐ四脳ゐ陣ゐ魔祓ゐとゐ名付でて又
　　努ゐゐ石ふの一名まて事ふまて武ゐ三様
　　又ゐる座敷を破るの兵策あり日本まで
　　ゐ名人指手人張とゐ名付く和画のゐ脳
　　地形
露　　さまれば文ト答衰答話ありゆ
　　俗の名ゐ
市　　安国をゐゆふ文様の胴を載る昭
　　あ国の威一答ゆまを海ふ文様の答
　　あり初ゆまり大ぶくろせんざん

是等をいふ

露　こゝでスは矢筈を今まで矢〳〵と分て名付し矢の名

市　遠笹狙射用の笹と加の同楊羽笛此中の笹ばかり羽笹巻けふ矢着

露　表の口節ハ

市　根元の火風

露　上の一下羽

市　實の一ツ割

露　狩用法の事柳を射ふ的ふ言ひ割ふ的ふ故ひり是等の名ハあるべし

市　又より曲れる方の矢ハ月かさ〳〵ひつゝひ矢ハ日輪ふ表し矢ハサハ富を加さどり月星の三光をもつて表する的を的とふ〳〵狐を射るを云ふ矢の根ふ富貴同の物柳ハみどり葉ハ松ひ俗撥ハ刈ちくみ矢のめくまでいふ是ぬとふとかもとぞかゝどのものもあるづして只一ツ的ふ射れバこゝろと的ハてあてどもあさめりさ的ふ俗のあぐさこゝ狩人のたゝれこゞサアを手ぐ組ふ拵割があふバサアうつくしやと一向会衣

露　サア

市　サア

露　夷　サア〳〵

市　近言いひぐでゐる

露　ゐ

ト言ふつまり二人舎の走字　翌午　卯丁八日記ありあるゐ〳〵を拵て折てゐる市蔵丁ふ日ひりて来ふあ

ゐ〳〵こゝ言ふ丁八みどゐゐる是ゐり落こ打てゐる木刀をうくり三尺ひりのトこ落こ打出〳〵この打露ふいふ〳〵ゐゐゐてこゝ分付の通を面て実いてゐる三尺ひりいふ〳〵ゐてトこ落を走蔵されふゐをゐる市蔵さ落を打出て露蔵〳〵さる門ゐゐこきうと拵る市蔵ふ中ふ居り扇ひを

平伏して

市　是ハ先生まづ御手をあげられ升お手をあげられ升イヤモウ拙者とても白倉氏のお
手際ぶり感入升る

露　ミテ先生の御出生ハいづれ

市　今ハ何を包ませう拙者生國ハ肥後の産
人宮本無三四と申者でござる

ト　是を聞て驚き悔りしてさうでござるか

露　何宮本無三四とな

市　イヤ宮本○宮本氏と聞て何れもの驚きさハ先
刻御内が吉岡伝右衛門どのゝ御弟子宮
本武右衛門殿ゝ養子と承れバ無三四殿

でござるか

市　いかにも白倉氏の拙者が身の上御存じ

でござるか

露　イヤサ無三四殿の名ハ四方にとゞろきてかくれなし何れ

ともあれ宮本氏ハ定めし旅行の御つかれさそ

稽古場へ見ゆるげな先づ奥へ参つて今日の御祝

の御盃何れも無三四殿奥の間へ御案内

武　夫れハ

市　何さ旅行の労れもなけれハ気遣ひ御休息仕ら

ぬ

露　イヤモウ宮本殿くれぐれも御手前と

稽古場ハ蔭ながら先生に何事

現　[illegible]

武　ヤ弟子○新兵衛殿〳〵[illegible]

ト　唄になり市蔵先へ立て御先にて風呂敷

を持て門弟の内案内して奥へ入る菊之助

市之丞蔭子の内寺方より取つぎ御ざ

そこへ市蔵一寸挨拶をして奥の間へ案内

そのぞく右の者へ蔭子をさゝへるよし御扇

小てしまらぬことゝ市蔵門へ左右の扇を

見せ蔭子よつじやりて露蔵現平八

菊之助しなて

現　先生今の若輩が宮本無三四とあかされ

丁　実あのさ[illegible]しなり

露　ナニサ身が門弟の体を本字流を教へねらぬア

無三四

武　今は一向どなたでも承り合せしよふされ

菊　実手柄の[illegible]

これ自在の取りがたく強湯の若小姓関たれ
ついふむし難しき取い仕方と何れも甚牛
腰いろぐでみる

況

イやモウ通れぬ牛さまでも是と軍まい次山
又牛さぐあしまた風呂吹せめこの妙
牛〳〵

丁

伴先されくぐ奥〳〵手つく酒をまやこふ進めナ
ばかの義をこめつこふ迄ぐいん話スまいよ義いろぐ
でみる

露

かるかどこれいまみ付〇幸〳〵姫糸萩も
珍仕ふあし色でまうの酒をまこめもぐ老々
のをこ口をれば意ふ色をと奉ぐれてうつ取
つてもと姫ふ人今ヤこまかぐまる版

鬼

東れ四まる版

露

柏青八牛取小中付風呂のこんな新の羽意伯
れまふ〇コレ

卜取牛舟ナ八さてやく鬼〳〵版〳〵呼
くまみて

羽八

露

かるこぐまふ始りめさまる

鬼

始ぐば生を

露

コレ〇鬼そうみ〳〵

卜鬼くせ〳〵仕仕組立家あくせ牛月
成迄方こぐ八生こ

本舞台三間中筋の出体本組付向の舞上手浪よ体
牛ま前の奥座敷の杉板三重ふ市松かみ小切を
拭縛をし三姫まを盃を扣〳〵指うん内立る家の鬼う刷

卜舟の上より

歌の由組と声ふ舟が奥座敷の宮本
妻三尺今ヤ有り森の松そ内杉の来
宮め姫より声ふ鬼ふ出ぐつこの名

くの義〳〵くす通り

卜奥の舟ふ鬼ふ脇元の松くまて妻ふ来
組をのせおまて来り

舟元

舟ふ口宮ふ舟ふぐ口ふくふふり舟ふ口宮ふ上
ふれ舟う

卜おまを市舟ふう

市舟

ふう〳〵家舟千方〇イやの立安中鬼出中も
多の間小成口舟家の門舟元も大せれみぐモとも
声宮舟舟ふうとの人ふおまをこの舟

（源小五三位いふ）人来

ハテおのれめ我ためのみ能法ふあるほどさ女ふ来の
除仕そいてこせるふり義ふみさるといふ詞文
さんぜん自金ノ祖の指つれを吉原の室子宮年
（養子ふり）しゆ今日してくちつといふ合点
ふりぬエシヤ当ぬ歌者流の田福の有様ふいテ
笑ふ

ト二ふしみ月て

ハテおのれめ来ふみさらニトふりぬて十六歌
月のまゐ来ひさ人のみぞこふ来てもつさる
そこんのものさ娘の来歌をニロご希ふ義
ふしてくるさつく

ト業を命てこし盃をおきて来てゐのス

市　中山宮三位ふ又土の作ふ山ロ者れ体めふさニトッ
山近めやせこ私ふの三分山ニトツ山よりふ歌ふせ
イやくる来山酒いつふふのるほじや山地ふ更
外さも月和ふれがロ五山孔せやてふくりふれ
左和ふふ〇せの角そこ五の山るてふしいつい
ふふぞ女ふトツおよりふ歌れてゆさり外そ〇

（三位ふみそふる来歌がゐふぞ兄今ふ三位
ふ歌

菜　ヤアゆふつ

市　ここふこ

菊　さのふ一の宮のる居着て

市　一すロ更今ヤニロ娘

菊　そのゆのお作ふ五

市　ゆひもふふ如

菊　ふのつふふ

市　ふいおくり

菊　（ニロいおくりことやヤ打ニロニふくい
今ふ次ふしてゆふふお歌通ふの記業
ふぞ女ふ風体ふり

市　物いこふこの自金石のロ皇女でゆりしてふ
菊　ふのつふふ来てゆさりヤこつりヤ〇

ト今方ふ如り

さのふ古伯津（母ニ五とお手ヤ女打る居
で私ふさつ歌我ふ切五（打ふふあるでゐ
いぞふ如ヤこふの今ヤ如り）ヤ山孔ふニ五
ふ女の如ふせさせられヤふのつふられやく
今の如のあるこ五ふのつヤたゞ如て来て
ゆさりヤこつりヤ〇私ゞ関ふ今ヤ月ふ

〽推量せられよと言しばもおばしこそぐちの今
涙に暮るゝばかりなり
ト市若が泣くを市若見て思入れ
帝　ヤアそのまゝ〳〵大切な姫を庭にある茶屋にお構ひなされて〈後ニ〉お女中にして若恋さまござる白金が娘なればおなごにござる思入
菊　ござるか
イヱ〳〵私はアノ白金の姫でござります
帝　なんと
菊　私が名はの又六細川の本家刹之丈那ア白金長者の世話にて是を成人して私證拠は彼へこの書きとて金の箱
帝　その外にも此家の家久利加羅不動の尊像水難火難をのがるゝといふ家の宝ばかり夫が證拠
帝　のとゝさまの看板をみてござります
菊　ソリヤ白金が姫でござんすと申されまするか
帝　ハイ此妻證拠ばかり
ト此の守り袋を見て思入あつて
禁　姫〳〵気を静め○
〽嬉しさに母人は母の手前何ゆゑの心をもぬ辨当の名も奥の下
涙せきあへて
ト村右衛門奥から出て
是〳〵は宮さまのお姫子にて此者を差出す段を御承知の私是は伏見の香を谷と申しまする
主人御法律は前後の上の御子のみ申しまする
是は此内宮でござる事兼ては宮本左近
と申す者物語りは別二人に私共申しまする
是〳〵は此度のお二人にお目にかゝります
帝　左様か
村　イヤモウお叱りなさるは御尤にて色々の御事
つかひもうは構ひ申されず
村　モウ此上は違変の事なきとは道理を見れ共
是非姫様をおつかりしていやるぞんのう
菊　アイ○イエ此事はさてお嬉しいじやとなア
何かとお嬉しいでも母が此進め申したとの事
らぬ姫おせよしと捨てあじや
帝　イヤ〳〵内室は此世話は今日より改めて捨る
まあまあ申されぬ親子の御目にかゝ申されぬ
村　夫は今日の妻子の本望に身を折角の大義といゝ

村 私もいれて下さいませ
市 お祖父様のお手伝いをしたのみでございます
村 其の内宮でございますお爺様の宮本三位
市 様お爺様の御別宅へお移りなさる
村 其の内宮でございますお爺様の宮本三位
市 様お爺様の御別宅へお移りなさる
村 イヤモウ忙がしくござる御挨拶で急くのも
市 つかひもウ御挨拶やうございます
村 モウ改まつて御遠慮のみでございますと御遠慮も成れ申
市 せぬ娘御をうろうろしていやるぞいの
村 アイ〇イエ私もさうおもつてゐるのでござりまする
市 あんまりお嬢様でも如何かと御進めやうも御
村 らぬ娘おてこをおてゐるや
市 イヤ内宮の世話の手前よく成るべく抱えて
村 まいりますと其の寿命の長短折角の養生と
市 申すは如何なものでござりまする御気の
村 毒ながら
曙光 ト合方になり妻ぶつの着もの
せてこしおもり
ト合方にて幽霊の孤を抱く形
村 サアこれでよいとおもふ御安心なさいツ
市 のんでござりまする御安心なさいツ
村 デモおこんさんがあんまり
市 いつまでもおこれ抱ぶ抱してやりますと
村 其の内にゐのか
ト美濃助重石を上る村安重つ跡へ
市 出る美濃助重を抱てもどり
村 出そふ重をちやつとあやしてやるのも
市 それでもござりまする
村 子供の時抱おこをしたことを彼是
市 申酒の事こんおはなしをする
村 サアくお子様ごんおとお重石抱ぶ抱して
市 内宮へおこれ抱ぶ抱してやりませう
村 いつてござれ体お大事に
市 ハイてござれ体お大事に
村 ト美濃助重石を抱て入る中の戸
市 ト美濃助重石を抱て入る中の戸
村 ト美濃助重石を抱て入る中の戸
市 ト美濃助重石を抱て入る中の戸

ト市蔵酒をのんでゐる思入にて

市　サア内室イザお酌申さねば

村　いやいや一ツ献は宰相殿の升一寸こんなものを

市　ウヽヽトツ
イヤ盃も最ふ一こんもいけ升ぬ　御酌は下
されい

村　是は又余のみぢかい

ト奥ヨリ小峯治出て来り

小峯治　お客人さる事に存升る旅行のお労れもござんすが
湯風呂へ召てお体を休めなされませと親共の申
付でござり升る

市　是はゝ手前ござり升るお心添お人（?）忝ふの御
労れ御振舞に相成ましてかたじけなう存升るが先お湯は
が仕舞申さず

村　見れは今日初ての風呂濡ならうが事ながら湯を進ぜう
お一ツ入湯なされませ

市　仕合ながら左様ならば御進めにまかせ入らば御入れ替へツ
て気楽にあぶれは御拝領致してお礼に申升る

村　それにお待ちなされませ娘は案内湯殿へ御用へ参り
升る　御免なして

ト村右衛門小峯治奥へ入る

市　是は御案内お世話に存升る

ト内へ這入菊継ふ持って上る

菊　お客人さあ御案内致ませ

ト独吟の唄に成る菊案内で市蔵入る

独吟　浮草は思案の外のさそふ水恋が浮世か浮世が恋か
ちよつと聞たい松風の

ト此独吟の内菊出て来る

本舞台三間の間野方屋体上の方一間の間風呂
場にこれある仕掛宜敷く[illegible]

ト市蔵浴衣姿にて手拭を持ち先へ出る市蔵
中[illegible]ゆるりと出て来り

菊　サア中へ是が風呂でござり升る

ト市蔵大小をぬぎ刀を菊に渡し帯をとき是
る

市　是はゝ遠方山中さぞ湯は○

ト四辺を見廻して[illegible]申て

菊　拙者の父は[illegible]で居る其代で[illegible]ござるイヤ何娘
お前[illegible]たる当家の主人何りの御[illegible]不吉なる
太郎左衛門と申し仰[illegible]中[illegible]

ト独吟の唄りに成る是にて市蔵立かゝり

何か思入有て思ひ出す

独吟
浮草は思案の外のさそふ水恋が浮世か浮

世が恋かちよつと聞ひた松風の

ト此独吟にて思入有る

本舞台三間の間野手屋体上の方一間の間風

呂場にこれ有る仕掛け宜敷納る

ト下の方より菊次郎ゆかたにて手拭を持出て来る市蔵を

見付てゆかたを引かけぶらぶらと出て来り

菊
サア申是が風呂で御座り升る

ト市蔵大小をぬき刀を菊次へ渡し帯をときかける

市
是はく遠方故さぞ御退屈○

ト刀を取て二本差しなりて

菊
物申す神の御心は恵みの深い御方で御座るイヤ何娘

はお母様たゞ今の旦那の御人何かの御世話に不吉思

太郎左衛門と申にはまだ御礼も申さぬ所

義はムゝりまする○

ト いへども菊次郎市蔵の顔を見てうつら

りして

市
是サ娘

ト是にて菊次郎気付て思入有て

菊
ハイ何ぞ御用で御座り升へ

市
是はけしからぬ姉様今一度お耳に入れませう

お菊さんは何か申に不吉思よりは中程でも市

に何事をいふのは申にくいござんすが御兄様と

して申されコレ女中

ト思入
聞へどこでもくも山はとてござ

ト菊次郎に先程市蔵ゆかたを着てる思入

有て

菊
モシ旦那様お前もお出でござりませう

市
イヤくモウ私も参る気になりませぬ私も此風呂

入りく私が此湯のかげんを見てあげませう

菊
是は御気の毒で御座る

ト菊次郎湯のかげんを見て

市
ちよつと御座りいよいよコレたしかに思ひお持じやサ

菊
アあたくおそろしく成れ升る帯をといて上ゲ升う

市
是は差て遠方千万女の身として男の帯

に手をかけるとは千万

ト菊治郎小半治とやりあふ事ふ桶手ふ風呂
の中へやり浴をかけ此市兵衛風呂へ飛
込小半治あとへ戻る是ふて市兵衛ハ
皆々ふて戸を押へる露菊出て来り

露　何れも此若党〱それ男衆の八寸引つかく

皆々　合点だ〱〇

　　ト路〱引をかし戸へ廊下へ打つけて

露　若せまんまと着尾結

皆々　何事〱各〱方此度義ハ家来ふ来ル中
付紫新を持て来り楔上ケ大谷ふ次ぎら世重
ゞる機場をはのつぎ此律郎ありやる此屋ふ申され

皆々　合点だ〱
　　皆々打連れ欠け行跡ふ姫ハ一人寂
　　ト皆々奥へ這入ル菊治郎是を見送りふね

　　こなし

道　ヤとゞ忠門守中の今の様子何事ぞ此間合居
がれ此をぬ大切な此客人とあしらひ振舞
ま様つとふの中で何ぞ此所へ忍んで居るふちが
いあるか

露　アノそりや若党の眼を見て何科ありてか此事
まアしらぬ者の事ねぶぞ出て来られた事
ぬ子細あるか女の身やとてすでにあれ加へておかう

道　イヱ〱是ハ気ガ咎めて身ふ持ちして来ぬぞ
の勝負ハあされぬで此奥とれへ来て直し来る風
呂の中で此殺そふとふねへ廻りぬどんなふてん
とへどのふあるかと思ふとそれを此者〱の此命助る

露　ゑハアノ手を放つてそふもおや

　　大切な稲を来るつけ来て

道　そりやうぬハアノ二世めふうつばれ

露　アイ此れ手を来手りでハえせぬアノ林左衛門
の主体の家来出ても殺されずふと来て思ひあり

此当ふ命を助られく大恩たとへ娘ふそむいても
命を助けふてゞ来ふ

　　手物〱大切な桑萩やぶじと思へる白金が
大刀ふさへられ持せる姫を是迄の様て
合せある〱親らふぐり

　　ト菊治郎風呂へ行き露菊を可愛し

　　て居る

露　皆〱ふ頼んども云付置し紫新屋先へたとべ
　　ト皆〱ふ来て皆々の顔ふて

世の中で〆殺そふといへ人もありおゐどふどふかくた
とへどのよふな事があるとても何事も此命助
かいアノ矢を放つてそふじや
露「大切な様をまつらとあさへ
スリヤうぬはアノ二本めにうつばれとあ
菊 アイ此れ菊之助手りでお見せ申アノ林君主の
の主体の存慕として殺されよふと来ておるア

此方に命を助られし大恩ある人殺に死おふても
命を助けんで置ふか
「手切へ大切の金五萩やら〆と留る白金が
大刀にさへられ何せる姫をしまうのはて
見せかるゝ恐ろしさかくり
ト菊之助風呂へ行を露野引留ず寒返し
て居る
露 菊之助どのも云付置し宗新庭先へまゐべく
トむりやりにて嵜への詮方にて
嵜 いやゝゝ——
「夫ハそれ呑込んだも大変そんな不敵の白金が
喜藤さ〆ていかざれ体を見て申請に往く
逢ふ〆宗新柏子の拍数ヲエッサッサッサ
ト露菊上手へ走り入向ふより村右衛門先
に中通り其外三階数大一同宗新跡
負ひのへの持ふく出てあて来り
「体を見て中島小者も皆に持つ柄にかけせを
流して風呂の湯も出入りたる粘湯之者
に家来た
ト嵜へ上手へ宗新湯ふどふ其びえ
「怪時が右に座庵に宗の山を返こ〆引る
蹄に金萩年も根乳
ト菊之助取付〆ニ嵜〆にて起す
又是とやで何事その命助けて取り〇何
菊 りあふわのかア
ト風呂の方〆何いろ〆足下見て来を釦り〆
「あせれどいうふ者明ら女子今ちやほさりへる湯
主の指と風に入〆むむせふ叔樋〆を殺
も身もよもかぶれぞとまに中らて浮思の
ト姫娘湯のたまらる色菊之助に宜敷ニ嵜〆取て
アレゝ-モウ湯がかかるさそいあ来〆まる折り

いろ〳〵とゐてどゐもあつあい男「ほそがどゐそやぶり
たぶ此人をがゐるぶ。
「三どゐの三甲斐あるくる外のゐそあさゐげ
さの内りがつき
ト合オ本ゐ作々木ゐの合を情久昭如意本動の
そ意深そ西特あまゐ時たと〳〵ゐそ人好ゐふくる「新そ
共オ本ねやまもつあさと吹今ねやまもつくる民の中
「あげのれ」ゐりこそ本動のそ意儀出利者ま
さふかんの〳〵ねつくさ三ゐそ本動のゐオ本ゐ者の方
いふ者さ久利かふ本動のゐ。〇
「今ゐろていのりけゐ
そねあそこの〳〵本ゐけるふい裏ま〳〵ゐり深ゐの
せんそ程ゞ近たそふゞやア

沙羅

そあいさぬ
「ゐあそそ本萩さ〳〵ゐオどうこ本ゐゐ如と存付
ナゐり本ごゐさるゐ本のま係
トあ〳〵ゐゐて小ま落ヲ本ゐるゐ市翁
の大小ゼ元ま本ゐ次俳「打てゐるゼ
ゐ本ゐ当て
「ゐの一筋小裏ゐさ」て
トゐ座俳こゐ」ゐて大小ゼかく〳〵小ま落ゼ
ヲ本ゐ指る能的今ゐづき跡近ゐオ人
ゐゐ具ゐ人ゐこ

本寿意向ゐ氏ゐの裏ゐ多上下程ゞゐ勢
「東新ゐつくま的意ゐ楼て居る姫俳深のくざる者ゐて
近ゐて例る

「いこゞ行ト郭小度のト郭てんでふ透
ヲゐんゐくおくべ〳〵楼ふるゼせか
らざる整深の姫猿かまやくるのゐのね
り斗ゐあんどもかくやらん

ト式深ゐの深ゐまゐ「ゐ郭程ゼ本外
「ゐ仲作る深ゐふゐて八ゐくる取よま
ゐ本ゐふゐて来り
本ゐ名いづれも着尾紙ゐて宮中ふ宮ゐ本「ゐ
ひの外氏ゐの前例ゐりくことゞつまゐ本ゐふる
病前ゐくふ作ふて打捨ゐ重ゐねねねゐゼまれん
ゼ子ふ楼深の中小作ふもゐねとゞゐふひゐてゐあ
丁八ゐねくゐ楼ふて「郭ゐが取てゐ深ゐくり
深ゐたまゐゞる

国立国会図書館　タイトル『三升蒔画尼敵討巌流島』　請求記号 824-2　ガラス使用

本舞台宮本風呂の裏口より上下松だけ門弟八中方大勢
薪をつき重ね答を焚て居る所釜の湯のたぎる音にて
道具納る

同「いざござれ下知に随ひ手練でんでに透
間もなくおしくべし　焚立る其せいか
らざる釜湯の地獄からきやくのそのたぎ
り手段なんどもかくやらん

ト此内湯殿ゟ湯をつきまで露路照平衣装好
門弟中伴なる随く出で出てハツハツく手桶上手
ト常五郎出て来り

常五郎　いづれも首尾能来つて宮本無二斎実子武蔵と名
のり此風呂の前例ありいとこぶつよふ承りたる

露路　あつく焚立て打捨　是非なき御主人の仰
照平衣　焚湯の中に居ても死なぬといふ八丁目で六ぶの
丁八　左様くらふ焚立ては鉄が張ても湯が漏るどうり

随く　たよふるでふる

ト此内少く焚きまする随く少し付

露路　此上ハいづれも湯殿をおてつき待用

随く　いふにも左様仕あり

露路　いづれも出され

随く　御用承く

同「まつかせ合点と銘々に息せき切てぞ

ト三寺にて露路初め随く奥へ入る此時文吾入
悟の杜並つぎきの大湯殿様り入り白
衾がうらふ御蔵の宮本が湯く実を以て中
さるの用も当らぬ風情あり時に此時又
利加の郎不動の体ゆ身宮本が有体ふうてせさ
まふにや風呂の内にめりくもうしあり二言まち
人数と居聞て居をふまくできる承ぶ其奉る
が勇猛おぶし吾人は知らぬ

ト此内風呂仕舞にて湯おん見でき中
が市蔵も加ぐでも赤く成りせんの
内方の形りにて風呂の戸居る者太方
にて成んでおる

随く　それやこそ

ト腰実持ちて寄て吾と一寸立上りまる
只今に随く人の所物ゆ成り市露太郎どおきず
出向を立上りおてゆく風呂の中へ居く

ト大ゆすり市蔵小腰こなしにて大ゆすり
市　承蔵どの不動のうら係承知致して
当　平役儀ゆえ私が悪振事ゆえ平役ゆえ
ト多く悔ゆる様子にて自害する
市　さまざまとして承蔵どの立ちゆかぬこと
事事永暇一ツ連れ申事なれば
当　平蔵しうの人々を

ト大ゆすり市蔵小腰こなしにて大ゆすり
市　承蔵どの不動のうら係承知致して
当　平役儀ゆえ私が悪振事ゆえ平役ゆえ
ト多く悔ゆる様子にて自害する
市　さまざまとして承蔵どの立ちゆかぬこと
事事永暇一ツ連れ申事なれば
当　平蔵しうの人々を

ト大ゆすり市蔵小腰こなしにて大ゆすり
市　承蔵どの不動のうら係承知致して
当　平役儀ゆえ私が悪振事ゆえ平役ゆえ
ト多く悔ゆる様子にて自害する
市　さまざまとして承蔵どの立ちゆかぬこと
事事永暇一ツ連れ申事なれば
当　平蔵しうの人々を

ト大ゆすり市蔵小腰こなしにて大ゆすり
市　承蔵どの不動のうら係承知致して
当　平役儀ゆえ私が悪振事ゆえ平役ゆえ
ト多く悔ゆる様子にて自害する
市　さまざまとして承蔵どの立ちゆかぬこと
事事永暇一ツ連れ申事なれば
当　平蔵しうの人々を

ト大ゆすり市蔵小腰こなしにて大ゆすり
市　承蔵どの不動のうら係承知致して
当　平役儀ゆえ私が悪振事ゆえ平役ゆえ
ト多く悔ゆる様子にて自害する
市　さまざまとして承蔵どの立ちゆかぬこと
事事永暇一ツ連れ申事なれば
当　平蔵しうの人々を

ト大ゆすり市蔵小腰こなしにて大ゆすり
市　承蔵どの不動のうら係承知致して
当　平役儀ゆえ私が悪振事ゆえ平役ゆえ
ト多く悔ゆる様子にて自害する
市　さまざまとして承蔵どの立ちゆかぬこと
事事永暇一ツ連れ申事なれば
当　平蔵しうの人々を

国立国会図書館　タイトル『三升蒔画扈敵討巌流島』　請求記号 824-2
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『三升蒔画巵敵討巌流島』　請求記号 824-2　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『三升蒔画扈敵討巌流島』 請求記号 824-2
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『三升蒔画巵敵討巌流島』 請求記号 824-2　ガラス使用

824
52

国立国会図書館　タイトル『三升蒔画扈敵討巌流島』 請求記号 824-2

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『三升蒔画屓敵討巌流島』 請求記号 824-2

ガラス使用